第 70 回中部大会 生徒講評文

12 月 27 日(水) 3校目

名古屋南高校上演　作品名『　おり、ジなる。　』

　この劇のテーマとして「自分の本当の気持ちをさらけ出す」ということが挙げられた。自身の意志を貫く「キョウ」と、周りの人に合わせようとする「リツ」、対比した二人の思いのぶつかり合いが描かれた劇であった。周りの人に合わせて物事を運ばせようとする現代の風潮も感じられた。

　演出としては、オーバーアクションによりインパクトを持たせるほかにも、観客の目を引かせる工夫が感じられた。最初に始まったダンスがこれから始まる物語の予告のような役割を果たしていたことで、オープニングから観客を引き込んでいた。前半のコミカルな演技と後半のシリアスな演技の落差の激しさが、物語により抑揚を感じる工夫となっていた。その間に降りてきた、ホリゾントを隠す黒幕が、この劇の前半と後半の転換を際立てていた。誰もが知っているおとぎ話を使用することにより、物語の内容が観客の頭に入りやすくなっていた。リツやコロスが黒い服を着ている中、キョウがただ一人白い服を着ているということからは、意志を貫くという他とは違うキョウの性格と、彼女の孤独感が感じられた。また、何冊かある横書きの本の中に一つだけ縦書きの本を加えることからも孤独感が表されていた。

　スタッフワークとしては、まず、キャストが全員で指を指すシーンでの照明の明暗を細かく調節する切り替えが上手く成功しており、それによって場をゾッとさせる効果があった。音響は舞台の演技を邪魔せず、音が先頭に立って舞台の雰囲気を変化させた。シリアスな場面であえてアップテンポな曲を使用することにより、そのシーンに疾走感が表れ、緊張感の増すものとなった。大道具で、最初は扉として見ていたものが後半になって本としての役割も果たすところにも、舞台に変化をつけ観客を飽きさせない工夫が感じられた。これらのスタッフワークから、舞台全体の雰囲気を細部まで作りあげたところにスタッフの団結力の強さと技術力の高さを感じた。

　様々な要素と多くのキャストの動きが入り組んだ脚本の中で、前半のおとぎ話の部分も、後半の展開で作品のテーマに迫るにあたってムダなく生かされ、観客の目線がこの二人に絞られていた。最終的には物語の中心となるキョウとリツの二人だけのやり取りを観客の心により深く刻み込んだ作品だった。